雙生隅田川

近松門左衛門 作

序 荆の宣王に江乙が答へ。狐虎の威を藉つて百獸を從へ。則ち其の虎を欺くの詞。一狐を以て萬世君臣の戒とし。君明かに臣直なる。御代傳へ來て七十三代。堀河の院御靈夢に因つて。山王權現二十一社の神垣に。二十一基の大鳥居御建立太敷立つる鉞始。斧の柄長く神と君オロシヘ民を惠の功績なり。地吉田の少將藤原の朝臣行房。造營一式承り嫡子梅若丸。執權縣權正武國相具し。御普請場は運や志賀の濱邊に假屋を打たせ。伊吹纜向木曾信樂の良材寄せられ。ずといふ事なく。地行房の小舅常陸の大掾百連。總奉行の宣旨を蒙り假屋に着座を列ねらる。詞權正武國御意を請け大工小屋に向ひ。新始の御祝儀勤めませいと陳べければ。地木工修理の兩棟梁大紋の露結びあけ御假屋に一禮し。御酒散米の供へ物。新に幣を取添へて。祭文をこそ齋きけれ。夫。天闢け地凝り。伊弉諾伊弉册尊。男女夫婦の語らひをなし陰陽の道長く傳はつしより。生れます神の宮所建つる鳥居の二柱。フシ一人は立たぬ理を。人に教の道とかや。天に日月夜晝の二柱。生あれば兩眼あり。松の二葉は常磐にて。嵐に脆きは。一本漉。されば大聖釋尊は因緣生死の二つを教へ。儒には仁義の二柱教へ治まる君が代は。神明和光の秋津國。一の新に天長地久君コハリ萬歳。二の新にて五穀豐饒民安全。三に山王御威光增益。鳥居成就御願圓滿ナホス千秋樂と。祈念畢れば幕の中數千の番匠賑ひて フシ既に。酒宴を始めける。地常陸の大掾百連大音擧げ酒宴待て〳〵。詞新始の今日より斯る不念にては。二十一の鳥居成就心もとなし。奉行も俱に迷惑せんより直に參内し。地此の趣奏聞し今度の奉行辭退致すと假屋を出づれば。少將驚き無骨なり大掾殿。詞心に入らぬ事あらば。これ〳〵の次第と内意を通ずるは傍輩の信。況や我が妻は貴公の妹。此の梅若とは正しき伯父。存じ違ひの事あらば心付け給はるべき所。地先づ行房が不念の條々承らんとせき給へば。詞ヲヽ聖賢なればこそ。前かどくれ〴〵申さぬか。今度は大事の御用冢の規模。材木に念入れられよ。御邊の領分比良の嶽には大木の杉數多あり。四五月頃迄の雪嵐に揉まれ性固く木目善し。杣入れられよと申せしを聞きながし。此の材木目に見えぬか。地日裏陰山の雨晒し朽木同然。鳥居にして二年は保たず。詞先年奥州國司の時。金山貢物運上にて公冢一番の金持。地下屋敷に珠玉を彫め班女といふ妾をする。松若といふ妾の子を攝冢清華の御公達

も及ばぬ待遇。其の費十分の一入るれば皆造宮も心易し。エ、同歴々の家老ありながら私慾にばかり目が光り。諫言いふ術知らぬ。地町人に同じき主従とフシ一口にやりこむる。地武國堪へずつつと出で。同百連公には烏居の御奉行ばかりと存ぜしに。主人少將妾どもの事迄御奉行は御苦勞千萬。事多き中に此の材木朽木と見給ふも尤至極。此の方の領分比良の嶽の木を伐れば勝手づくには珍重さりながら。隠れなき魔所天狗の栖家往古より仙入らず。木の葉一葉一木の枝も折る時は。山荒れ人惱み必ず國の歎となる。地寶祚萬歳民安穏と勅願の烏居。其の辨なく魔所の木を伐り祟あるまじとは凡夫の某請合はれず。同拙者が相役御存じの勘解由兵衛景逸は。是非比良の嶽の杉を伐らん我等は伐るまい。イヤ伐らう伐るまいと諍ひ彼が詞を用ひぬ故か。四五日病氣の由にて今日も不參。地比良の嶽の杉を伐らぬは主人少將存ぜぬ義。此の權正武國が下知奏聞なりとも言上なりとも遊ばせ。苦しからずと詞ににべも輕薄もフシ荒木を伐つて投出したり。地百連何がないひたけに口動ついて見えたる所に。俄に轟く地車えいやらやあの木遣の聲は磯打つ浪。人夫の足並地響して杉の大木程なく車引据ゑさせ。勘解由兵衛景逸主君少將の前に跪き。同御奉行百連公の御指圖を重んじ。御領内比良の嶽に仙を入れ。大杉數百本伐り追々山出し。先づ今日の釿始に用ひん爲此の大木急に曳かせ候と。地申す詞に少將親子ハア。はつと恐れし興醒め顔フシ鬼角の。拶挨なかりけり。同景逸重ねて。殿の御機嫌進まぬは。粗忽に魔所の木を伐り後の祟りを思召す御顔色。少しも御氣遣ない事。勘解由兵衛がさ程の事辨へなくて御家の執權と申さるべきか。地則ち比良が嶽の御神に祈誓し。祟を免し公用を勤めさせたび給へ。科あらば某一人を天狗の爪に擒割き取殺し給へと。命を抛ち御闘を取るに神納受の御聞あがらせ給ひ。同扨こそ伐つたる材木ども。祟あれば我等一人天狗に攫殺さるゝまでの事。地御心安かれと尤らしき口上。元より心を合せ置きたる常陸の大掾。ハア、同忠臣かな〳〵。一命を抛つて公用を大事にかくる眞心。神慮に叶ひ天狗の祟よもあるまじ。地權正武國と云ひ其の方といひ。少將殿よい家老衆持たれて仕合。梅若が生先まで頼もし〳〵と譽めあぐる。同武國堪らず飛んで出で。譽めらるゝ人數に此の武國は除けて貰ひ申す。最前家老どもあり乍ら私慾にばかり眼光り。諫言いふ術知らずとはどの家老。返答はありとも聞くに及ばぬ。地天狗の栖む山仙入は不得手なれども。惡魔の差いた大掾殿の首筋へ仙入は我等が得物と。刀の柄に手を掛くる。同慮外な言葉咎め刀抜かれば抜いて見よ踏み折つてくれんずと。踊出づれば行房朝臣ソレ梅若武國を制せよ。これ大掾殿。下官が家來お相手には不足ならずや。殊に

一大事の公用に私事を差加へ。叡慮を輕んずる誤行房一人の罪。地是非御宥免と押鎭め權正も此の通。急度心得今度の公用行房に成り代り。總て汝が身に引受け成就まゝでは我に奉公差止め。當山に逗留し宜敷經營仕れ。地景逸もこれに止まり武國に力を添へよ。先づ今日斬始の壽調ひ。貴公も下官も大慶これに過ぐべからず。奏聞のため一先づ歸洛と宣へば。百連もいざ御同道然らば御供と立ち給ふ。善と惡とは見別けても理非をばつけず兩方を。立つる鳥居の二柱朽ちせぬ。御代の三重八國廣き。人よ人フシ人の上には。品々の。行房朝臣の御臺所御心地例ならず。日毎に申の下刻より時をも變へずお姿の。二つに影の煩か但は物の魅入かと。藥よ鍼よ御祈念のフシ數には洩るゝ神もなし。地奥家老淡路の前司兼成參上と。御寢間の障子明けければ前司御前近く畏り。詞只今御容體伺ひ奉らんと存ずる所の御召。今日の御機嫌は如何もやとぞ申しける。ヲ、今日は少々快い顏見せて悅ばせんと。賴む事もあつての事。夜畫の心遣さぞ草臥。老人の慇懃なサア膝直せと宣へば。前司首を擡に着け。毎度申す事ながら。悍淡路の七郎俊象殿樣の御目を掠め。莫大の黃金惡狂に遣果し。縛首をも刎らるべきに。地御譜代の我等が子とて命を助け國遠仰付けられしも。御臺樣の御就成御慈悲。悍が奉公一所に二人前の忠義。身を百千に碎いても御恩は報じ盡されず。詞お賴みとは勿體ない。其方が命入る事あり其所で死ね前司と。御意なされ下されかしと。フシ金柑頭を下げにけり。詞ヲ、滿足々々いや氣遣な事でもなし。下屋敷の班女殿松若といふ子もありと聞く。地終にお目にかゝらねば朝夕ゆかしく懷しゃ。梅若公若兄弟顏を合させたし。度々殿へ申せども折を待てとて御延引。詞二人の家老は山王御普請の留守。殿も今日は御參內好い時節。其方自らが使となり。地班女殿松若共に呼んで來て逢せてたもやと宣へば。詞前司御顏打眺めハヤ、賢女樣賢女樣。只今迄の御延引もしは嫉妬の御心もやと存ぜしに。地御一家和合御家長久の基すぐに參り。お二人お供仕らんとフシ悅び勇み走り行く。地御臺御機嫌斜ならなずヤイ女子ども。班女殿松若の見えたりとも隨分慇懃にもてなせ。自らが大事の客無禮があらば許さぬぞ。さりながら此の事を自らが兄大據殿へ沙汰するな。必ず穩便々々と未だ詞も畢らぬ所へ。表使の婢女大據樣の御見舞と申し上くれば御臺所。うたてや時も時のお見舞。月に叢雲と。お夜物に打凭れフシ心重げに臥し給ふ。地百連寢所に立入りなう妹。詞病氣とは聞きしかど山王の公用に取紛れ。見舞も延引病症は何。食事などは變る事ないかと地いへども只弱々と。御用多き內御見舞に及ばぬ事。物申すも氣むつかし變る事あらば此方より。歸らせ給へと宣へば。詞いや〳〵斯程の弱り見捨ててはー

歸られず。氣むつかしくば構ひ召さるな。行房は參内とな。歸りを待つて醫者などの談合々々と。奥へ通れば御臺は勇む氣も折れて フシ障子引立て臥し給ふ。妻戸に立添ふ。幼聲。御臺樣へのお取次賴みたし。誰そお取次賴まんと十二三なる少人の。花桶に草花折入れて持たるゝ花より持つ稚兒の。姿を花と言ひつべし。地局の長尾襲押明け何方よりぞと一目見て詞なう輕忽や梅若樣。何處ぞ餘所のお使らしう。私をはめてお笑草にかはまらぬはまらぬ。地御臺樣へ申し上げ結句此方からお笑草と。立歸ればこれ〳〵女中。詞我を梅若とはいかい麁相。松若と申す者よと宜へば。まだいの朝夕お側離れぬ梅若樣見違へて宜い物か。地さう〳〵は騙されぬ何時の間に其のお惡意地覺えてござれと立歸る。袂に縋り引留め。これは迷惑とつくと見られよ。終に館へ參らねば乞は見ずとも松若が名は聞いての筈。母の班女も追付これへ。地此の花桶はお慰。御臺樣へ御披露大義ながらとありければ。詞エお前が松若君かいの。扨も似たり。誰が見ても梅若樣。瓜二つに割つたやうなと喫驚して。地驚く後に梅若君何時の間にお出とも。思はず知らず顏を見て是は〳〵松若樣。詞今の間に此方へお廻りなされたか。お足許のお輕いおまめな事。地御取次申す内暫時これにといひければ。詞ヤイ長尾。麁相な我は梅若松若ではないぞや。何をおなぶりなさるゝ。たつた今見た松若樣見忘れてよい物か。あれまだ麁相な。松若はそれ詞そちらにと宜へば二度びつくり。兩方見合せ〳〵ほんにさうぢや。詞瓜を二つに割らずに矢張り丸ぐちぢやと。地呆れて奥へ入りければ。跡にも顏を見合せて フシふつと噴出すばかりなり。地扨は松若殿かいの自らこそ梅若丸。何時逢ふ事と待ち兼ねしによくぞよくぞ此方へと。手を取れば手を取替はし。詞お館に梅若殿と申す兄君あり。折を以て逢はせんと母の班女が物語。地など今迄は弟かと。お顏も見せて給はらぬ。スエテお心强やと泣き給へば。詞懷しきは誰も變らぬもの。世界に幾億幾何萬の人あれども。此方の兄我が弟と呼び呼ばるゝは獨りづつ。地疾く逢はざりし口惜しさと互にひしと抱合ひ。連る枝の仲好けに フシ悅び泣くこそ殊勝なれ。地奥に御臺の忿の聲其の松若めどれ何處にと。襖襲はに朱の顏容花桶提げ搖ぎ出で。詞コリヤ松若とは汝が事か顏上けい。ムゝあの顏形が梅若に夫程似ずば何ぞいの。似る程胸が燃え焦がるゝ何の好みに爰へ來た。ムゝ淮したり汝が母の班女は美濃の國。野上の宿の傾城の成上り。少將殿の子を產んだこれ見よがしにのさばり顏せうでな。地此の花桶の姫百合。色は美しけれども恐ろしや班女めが。まつ此の通り根性が鬼百合。手に取るも汚らはしなう怖やとかつぱと投げ。花の露吸ふ山蜂の。針ある詞に松若前後も泣叫び。お傍の女中も

聞辛く フシ呆れて。更に詞なし。地梅若丸溫和しくなう母様。詞松若殿とても父上のお胤私も同じ事。生さぬ仲には猶恥あり。自ら同然においとしがりと言はせも敢すそれ程の事知るまいか。差出まい梅若默つてゐよ。障子の内には兄百連殿も御座なさるゝぞ。地松若を引摺り出せ意地張らば撲て叩け女子ども。サア此方おちやと手を引連れ。姿姿ゝ梅若丸打連れて入り給へば。局の長尾立寄つて。コレ詞松若殿。あい〳〵とは申せども撲ちはせぬ。泣かずとも早う去なつしやれ。地なう日頃に似合はぬ御臺様のお腹立。怖や〳〵と呟きてオタリ皆々奥へぞ入りにける。地涙絞つて松若丸。逢ひたい見たいと呼寄せたは偽。詞母様共に欺し寄せて殺さうでな。我も吉田の少將が子おめ〳〵とは殺されまい。地汝御臺め一太刀切らんと駈出しては立戻り。母様はなぜ遲いと待つ間もあぶな幼心。亂れ惑ふ次の間より人音して母の班女。詞松若駈寄りなう母様。今日爰へ呼寄せ二人を殺す御臺の巧。撲て叩けと様々悪口の概暑を。地語る子よりも聞く母の。心もくらみ逆上し物をも言はず立つつ居つ。奥を見遣りてはら〳〵涙。エ、詞上臈に似合はぬさもしい。本妻か妾か名こそ變れ吉田の少將殿の妻は妻。地されども立つべき人を立てるが女の道と嗜み假寢にも。館を後には フシ寢ぬわいの。地此の度の病氣も松若を總領に立てん爲。班女が調伏咀ひ事とお上屋敷取沙汰と。聞く度の口惜しさこれ清い涼しい心の證據。何處からなりとも見て疑を晴れ給へと。松若丸の頭髪かなぐれば痛ましや。鬢際よりふつつりと髢ばかりは手に殘り。何時刈捨の春の草情なや梳れば落つる一筋も。千筋と惜しみ撫でしもの。何故に斷られうぞ何しに出家にしたからう。家に望のない證呼ばれてあつと來た心は。松若が今生に父の館御臺所や梅若も。せめて一度は見せたいと思ふ心に惹され。殺されに來た口惜しい人手頼まず死んで見しよ。詞これ松若。無念な目を見て名の恥を受けんより立派に死ね。地心得ましたと渡す刀を取るより早く引寄せ胸に差當て。サア念佛といふ聲の後の障子をさつと明け。御臺所飛んで出でまあ〳〵〳〵先づ待つてたべ方々よ。佛神三寶を證據に今日呼寄せしは。使前司に貫含めし詞に露塵偽なけれども。 折悪しく兄の百連來合せて。アレあの障子の彼方黒書院に高い聲も聞ゆる。松若是へと聞きしより嬶しやと思ふ顔色を。地意地悪の兄に見咎められねすり詞の言譯に。態と苦口悪口を情なや稚氣に誠と告げしか フシ恥しや。地誠ある海山の志生を替へても忘れはせじ。二人の心落付け長う疑晴るゝ爲。心の祕密を打明ける。詞とつくと聞いて下されと聲潜め。そもじの腹より悦びしは松若ばかりと思うてか。あの梅若も此方の產んだ子ぢやぞや。何つがもない。悦は一度の外身に覺は

無いもの。さればいの。十二年以前二月七日。難産の苦。身に覺はあるまい。産れたは雙兒も孖子二人ながら揃うて男の子。エ。ヲ、肝が潰るゝ筈。其の折柄に知らせては難産の後治らぬ。血も狂はんかと一人は匿して我が手に取り。梅若と名を付け後まで雙子を隱さん爲。地側より養子と沙汰し置き此の事を知つたるは殿と自ら。扨は家老の權正。外には知らせず此の年月産んだる子より大切に。育て上げたる梅若丸一腹一種の松若。そもじを妬み疎み憎む程ならば。腹に宿した梅若を。フシそもいとしかるべきか。地車の兩輪兩翼月日と頼む二人の子。自ら息の通はん内松若の出家思もよらず。今は恨を晴れ給へと心の雙子底意なく。明かし給へば班女の前御臺樣のお情にて。また子を一人悅びし忝やと手を合せ。伏拜む手に縋付き。詞忝いは互の事お恨は殘らぬか。ア、冥加ない何のいのと。地聲を忍べば泣くまいと。抑ゆれば猶流るゝ。フシ涙が涙拭ひけり。地アレ此の奥は長尾が局。暫くあれに待ち給へ。兄百連を首尾よく戻し何事も。心靜にいざ案内と打連れて明くる障子の一重だに。隔て七つの時計の聲りん〳〵。とこそ三更へ暮近く。地行房御所より退出あり。鄙下傳の植込に黑雲一叢どうどつと落來る松風の。梢に怪しき物こそ見ゆれ。下郎なれどもお供の軍介力量者。詞殿御覽なされたか。見たか軍介。嘴長く眼は猿翼は鷲。扨凄じい鳥。否々鳥でない。天狗々々と地いふ内にひらりと飛んで火炎を吹き。御臺所の御寢所に。一文字に フシ羽打入つてけり。扨は御臺樣を此の天狗めが煩はす。ちと風變り此方から擂殺して呉れんずと。地躍出づるをやれ待て軍介。詞魔障の通力荒氣には叶はず。見居くるからは思案あり。必ず家中沙汰するな。勝手へ立てと宣へば。エ、天狗捕へ頼もしの銀吐出させずもの。殘多いとフシ呟き部屋へぞ入りにける。地奥に女中の聲々なう恐ろしや御臺樣。又二人におなりなされた。怖や〳〵と逃廻る。扨こそと少將そろり〳〵と窺ひ寄り。障子をそつと。憧れ臥したる御臺は二人。なう恥しい病を受け今生の恥曝しと。口說けば口說き泣けば泣き。はつと打伏す聲までも。何れを影とも實とも フシ擬ひ。惚れて在せしが。やう〳〵一人が顔振上げ。詞アレあの如く我が影の似せ者が。毎日七つ下兎より。附纏うて苦しむる追退けてたべ。我が夫と。地いへば同じく顔振上げ。詞アレあの如く我が影の似せ者が。毎日七つ下兎より。附纏うて苦しむる追退けてたべ我が夫。いや追退けるとは其方の事。いや追退けるとは其方の事。ア、怖や退いてくれ。地苦し〳〵と泣叫ぶ。顔も身柄も聲色も。二つ鏡に見かはす形何れを影の病ともフシ療治に困り入り給ふ。恨めしや少將樣。十年に餘る妹背の中見擬ふとは情ない。眼の前の仇を殺す事は叶はぬか。苦しいわい

のと縋付けば尤々見所あり。詞あれこそ魔障と飛掛り。小腕取つて捻付ける。なう恨めしや少將樣。十年に餘る妹背の中。見擬ふとは フシ情ない。詞いやいやふなく〳〵。最前より汝先に詞を出さず。後について口眞似するは曲者。行房が見定しと。地御佩刀引抜いて氣息の束ぐつとさし。刺るに連れて手足も弱り。うんと一聲此の世い限り フシ遂にはかなく息絶えたり。詞少將は勇んで物怪を斬留たり。人は無きかと召さるゝ聲。地班女親子淡路の前司。我も〳〵と駈け着くる。御臺の惱天狗の障碍。ありし次第を語りも果てぬに。詞御臺所突立上り。から〳〵と笑ひ。愚なり行房。斬つたるこそ汝が女房。我こそ比良の大天狗。住む山の木を伐つたる恨猶盡きずと。異形と變じ車輪の翼。地松若丸を搔攫み雲井を。フシ攀ちてぞ飛去りける。地悲しやあれ留めてたべと。班女は正體泣叫び淡路の前司も途方に暮れ。行房怒の目に涙盛空を睨んでわつと泣き。死骸を見てはわつと泣き。踊上り飛上り無念〳〵とばかりにてかつぱと伏して。泣き給ふ。地老功の前司が分別。詞これ天狗よりむつかしき百連奥にあり。只今の御對顏破れの端。一寸延びれば思案もあり。班女御前御同道。サア〳〵お下屋敷へ後はこの爺請取る〳〵。地尤々いざ班女來れと裏の小門より。フシ北白河へと忍ばるゝ。詞斬つた〳〵といふ騷百連聞付け走出で。ヤア斬つたとは我が妹。日頃の仕方思當る斬手は少將。行房出でよとすく〳〵と立つて怒をなす。イヤ主人は未だ退出なし。御臺所の影の病。御惱みを助けんと。一心に存じ込み天狗の所爲に化され。本體を前司めが手に掛けし狼狽者。詮ずる所主殺首取つて恨晴れ給へと。地指添引抜き鳩尾に突立て。南無阿彌陀佛の一息を。引きも返さぬ梓弓フシ浮世の弦は切れ果てたり。地百連ちつとも合點せず。詞前司が死骸をどうと蹴飛ばし。ヤイすつぱの皮め。談合づくの徒腹天狗のだし喰はぬ百連。身が供の家來ども。此の館踏碎いても少將班女を捜し出せ。地承ると眞先に仁王の樣な猪の熊八郎。其の外供人踏込み〳〵板敷をこぢ放し フシ建具を碎いて捜しける。地長屋に臥したる軍介ぼつ込む一腰鞘の弦。びんと反つたる髭八文字に搖ぎ出で。詞お供には草履取。御留守の時には當分出來合の大將軍介。泥脂一々引抜かんと駈込む間も無く。大將百連梅若引つ立て駈出づる。腕捻上げてこれ何處へ。何處へとは少將が出る迄の人質。ムゝ此の質受けた。どつこいと挽放し。百面百連大慾面と。腕がらみに引携いでどうと投付け。しつかと踏へ既に柄に手を懸くる。猪の熊八郎駈付け。軍介が片足摑んで撥の退け。主を引立てサアお退き〳〵。ヲゝぬからぬ〳〵軍介殺せ猪の熊と。フシ言捨ててこそ逃けにけれ。地猪の熊は軍介に汀侵りの大男。詞うぬ草履取に似合うた此の腦骨戴けと。

蹴出す膝節折れて退けとどうと蹴のめし。 腮く所を弱腰取つて引掴み。 ヤイ猪の熊。 熊の鼻には棒を振る。 汝は命を棒に振りたいな。 好きなら振つてくれべいと。 片手に提げくるり〳〵。 くる〳〵〳〵と引廻す。 なう眼が暈〳〵と叫ぶ聲に 地 殘る奴原取つて返して追取りまく。 幸ひ棒を持合せたと毆り立て毆り立て殪立て。られて 三重〳〵 逃げて行く。 地 引返して猪の熊を大地に打据ゑ足下に踏へ。 詞 生きた人の首引抜くを若君のお慰みと。 頸に兩手を引懸けうんと一息 詞 聲より先に。 ちぎるゝ首は童の捩ぐ。 フシ 蜻蛉の首より易かりける。 サア 地 御退きと梅若を負へば背中も香に匂ふ。 人間一生花一時負けるな。 劣るな。 名を下すな。 我を張る成を張る弓張の。 月よ雪よ。 餅よ酒よと替れども。 樂み同じ下戸上戸。 善惡吉凶皆一心と。 一念定めてうい奴けな奴氣味よい奴。 伊達な奴が花摺衣北白。 河へと急ぎける。

第二

地 烏に似たる蝙蝠あり魚に似たる蝌蚪あり。 形は人に似たれども奸曲邪僻の佞臣の。 心は暗き夕闇に 詞 勘解由兵衛景逸提灯に道照らさせ。 京極通を正親町行違ふ馬上は常陸の大掾こは百連公か。 詞 勘解由兵衛。 只今行房が館より歸る所 地 よき折からに行逢ひしと。 家來を遠退け馬上乍らいふ事あり近う〳〵と鼻突合せ。 詞 何事も心に任せぬ浮世。 比良の嶽にて木を伐つたる天狗の祟行房には當らず。 我が妹に取憑いて影の頃ひ測さへ。 今日變化と取違へ 行房に殺されたり。 妹が事は悔んで返らずそれを落度にして遣らんと悶きしかど。 淡路の前司めが科を引受け腹切つて死んだる故。 地 是もそれなりに妹は死に損じ思ふ所へ手が届かず。 扨て何かな返報と思案せしにヤレ屈竟の事こそあれ。 詞 汝も知る通り行房と某。 替り〳〵に天子より預る武帝の筆の鯉の懸物。 行房に渡す日限も近々。 地 是を押へて意地張らんと思ふを頼みに胸をさすつて立歸るシテ只今は何處よりの歸りぞと。 盡の焙をヤ其の儘に フシ 煤り返つて尋ねける。 詞 承つて驚き入る。 某は比良の嶽へ立越え木を伐らし其の代り。 十萬本の杉を植ゑよと。 行房申し付け候故畏つたる體に見せ。 地 大津八町の出女に酌取らせ。 此の四五日酒宴に夜日を暮らして只今館へ罷歸る。 某在り合せ候はゞ何とぞ分別仕樣もあるべきに殘念千萬。 詞 扨只今仰せられし鯉の懸繪。 渡すまじきとの御思案然るべからず。 何故と御意なされ。 懸繪はもと天子の物。 勅諚にて預るを私に押へ渡さずば。 朝廷の聞え却つて百連公の落度にこそなるべけれ。 行房は構はぬ事某が存するは。 何の事なく繪を渡し折を窺ひ盗み取らん。 地 行房が手にて失ひたる時は彼が越度天子の咎め。 官職を削られ流罪はよい首尾首が飛ばうも知れ申さず。 此の分別はと聞きとれて百連馬上を轉び落ち。 頷を顰め腰懸り。 詞

マレ 景逸上分別に氣を奪はれ落馬も覺えず。 地成程掛繪渡すべし盗み取るは汝が力くどうは頼まぬ。 コリヤ手を合すおかけ〳〵。アレ向ふから人が來る見附けられては互の大事。 歸れ景逸頼み存ずる景逸殿。家來參れと馬引寄せひらりと乘れば景逸も。上分別の圖に乘つて分れ。分れに 三重〳〵此の外にフシ何樂みを。白河の。所も吉田の行房卿四季を一目の。下餘庭に自然の。山河の フシ景色もえやは。岩疊む。千尺の瀧津白糸の結ほれ。心解き流す花月雪の其の外に色と酒との懸造。巧みに巧み物好きに。フシ飽かせ建てたる軒の端。 地班女と美に二人寢の閨に扇の。風入らず夏なき宿と。フシ住みなせり。 地下郎なれども御氣に入りの軍介。奥の出入の玉簾庭の隅々掃清め。花を攝んで投入に心利きたる宮仕。美容殿上中間にも茶道にもなり。お小姓にも。フシ草履取には惜しかりし。池の蓮の。初開き。水に錦を織りなす。えてたゝまくをしき花盛。朝來の白露香を促して益々遠く。行房御夫婦立出で給ひ。 詞ヤイ軍介。汝が綺麗好き言付けねども掃除氣味よし。此の投入も汝よな。没義道な所一興々々。用あらば呼ぶべきに立つて憩めと宜ふ折節。 地梅若丸珠玉を鏤めたる懸物箱。勘解由兵衛に持たせて立歸り。 詞常陸の大掾百連より。鯉の懸物請取り歸り候と差上げ給へば。行房取つて押戴き先御臺死去の時より。遺恨を含み仲悪しき百連。大方にては渡すまじと思ひしに事故なく請取つて歸る事。天子の御威光若が手柄部屋へ入つて休息あれ。 地大儀々々と殘からず悦び奥にすゝめやり。 詞班女も此の繪を遂に見るまじ。梅若が供して首尾よく歸りし褒美の爲。 地景逸にも見すべしと箱押開き手づから床に懸け給へば。各立寄り拜見ある。ハア是は誠の鯉。寫繪とはさら〳〵思はれずフシ是は〳〵と感じける 地重寶批言は畏多けれども。此の鯉に眼なきは不審にこそと申し上ぐる。ヲヽ好い不審眼のないが繪の高名。いうて聞かせんとつくと聞け。唐土漢の武帝の時昆明池といふ池に朝夕魚を釣る人あり。或る時鯉を釣り得しに絲斷れて魚は波に入り。命を免れ去つたれども針や鰓に殘りけん。武帝の夢に一人の老翁我が咽に釣鉤あり。苦む事堪へ難し取つてたべと歎きしかば。帝手づから針を取り苦みを助け給ひしに。珠一雙を奉り我昆明池に住む者なり。君が寶祚を守らんと其の儘鯉の形となり。去ると夢見し枕の上夜光の珠のあり〳〵たり。武帝其の鯉の有樣を自ら畫き給ひしに。未だ眼を點れざる内忽ち尾鰭動きしかば。 詞眼を點れなば繪絹を放れ必ず水に入るべしと。 地驚き筆を留め給ひし其の鯉は此の繪にて。代代の天子に傳はれども遂に眼を點れられず。 詞又日本へ渡りしは。元正天皇の靈龜年中我が先祖。下道の眞備といひし人安部の

仲麿に伴つて入唐し。是を傳へ歸朝して長く地日本のフシ寶となる。其の故を以て三年宛百連が家と我が家。替る〳〵預つて是を守護する事先祖末代の恒例。吉田家の規模是に過ぎず。重ねては叶はぬ事立寄つて好く拜見せよ。ヤア長物語氣鬱〳〵々々。ナウ班女蓮の盛あれ見られよ。楊貴妃が行水姿大液の芙蓉に勝りしと。唐人の自慢我もそもじと同船して。地班女が色に氣壓され芙蓉の花の色なしと。唐土迄も涎を引かせんいざ船遊山と手を取れば。班女品なく振放し。詞御臺樣の御最期百日になるならず。奥樣顏も否なり殊更今日は風烈し。海の樣な古い池危や〳〵いらぬもの。地いで女子どもに申し付け蓮の初咲手折らせて。御臺樣の位牌へと立たんとするを引止め。詞愚痴かな〳〵。死んだ女に遠慮とはなんの事。地景逸立つて舟言付けよ。お身を乘せて人交ぜず行房が舟押さば。八幡どうも堪るまい。否とはいはせぬ來り給へと乘らぬ心を打乘せて オクリ神代も聞かぬ水馴棹フシ歸を舟や。渡るらん。實に面白の折柄や春の花皆衰へて。野山火を蹈む夏の日に清江。三面の水を湛へ 小オクリ暑さ。流してさんさ。吹くやな松の風。餘りに吹いて松風よ。主ある花なア散らすなよ夏衣。薄き契は忌はしや。只蓮葉の心もて久しかれ〳〵蓮の花刈れ。刈取らば浸さぬ。浪に袖濡れて浮名や水に。フシさらすらん。詞いざ〳〵蓮刈らうよ。地中將姫の古は。法の蓮の絲長く。五色に染めし曼陀羅に。本尊かけたる時鳥の一聲は。藍より出でゝ。藍に濃く泥より出でて色染めぬ。蓮は花の君が代に。こと。ぶきていざや織るべし。フシ惠遠法師が其の昔。廬山に結ぶ。交りは白き蓮の露の玉。長唄濁に染まぬ心もて胸の蓮の影照らす。後の世かけて フシ織るべし。これなう爰に鯉鮒が。蓮の花笠 歌しやんと着て踊る態がしほらし。石龜も地踏鞴。鰻鯰は不形なものよ。是を來て見よかしのえ フシ朝夕馴れし。風景も。替る雲水遠近の。蓮葦ねて岸廻り舟を心に。任せらる。地百連に言合せし勘解由兵衛。天の與ふる時節此の際に鯉の。繪を盗み取り。百連公に奉らば百連は鵜の悦び。少將は蟻蛞腹立ち其の布袋腹刳拔いてやらんものと。心に呟き息を詰め氣を配り。木の葉に風の音するも。人かと心奥の間の床に怖々のしあがり。半分卷いたる掛物の鯉より躍る心魂。びつくり見れば南無三寶。梅若君。はつとばかりに飛退り フシ掛物詠めて紛らせり。詞心付かねば梅若君。詞其方も戀物を見におじやつたのと。地詞の中に分別し。詞さればされば重ねて拜むは稀の事。見事とも何とも言句に及ばず。凡筆ならぬ所ありさり乍ら。眼を點るれば繪絹を放れ忽ち水に勵くとは。餘り仰山な嘘らしい言傳へ。地物は試し日頃遊ばす繪の手際。一筆眼を點れ給ひ唐土日本。二千年此の方の賞否を糺し給へかしと勸むれば。詞

ア、あの人は勿體ない疑。地何の儀ある物ぞよし又嘘にしや。糺して何の德がある。詞いやさうでござらぬ。何時知らぬ敕諚にて。眼を點れさせ竅竅ある時。此の鯉が働かずば誠の繪は失ひ。體物に替へたりとお咎めの時は。吉田のお家の大事一寸墨入れ試み給へと。地勸むる惡事は繪に瑕付け。親子自滅のフシ詞を飾りてたらしける。詞それもさうなれど此の鯉が若し水へ入り。再び元へ歸らずばなう怖や此方や否々と宜へば。地よし水に入ればとて元が絹に遺いたもの。餘所の池へ行くまじ高が此の泉水。後は拙者が胸に〳〵ひらさら一筆遊ばせと。床の硯の墨摺流し退引させぬ入性根。幼心に尤と何の頑是も情なや。硯引寄せ筆染めて爰が眼と點墨の。寫ると齊しく黄金の鰭金の三十六鱗々逆立ち尾先に繪絹を叩き。揺ぎ放れて庭の池水四方へはつとフシ潑散してぞ飛入りける。地梅若君色を變へそれ見やつたの。詞サア何とせんひよんな事した景逸。地穎むく〳〵と泣けどもせん方波の底あれ〳〵居るわいの。父のお耳へ入らぬ間にちやつと捕へてたもいなう。詞エ、忙しない。急にはならぬ御前の耳に入つたならば常々の短氣。御手討は知れた事。事濟む迄は何國へなりとも御身を隱し。地我等が使待ち給へあら恐ろしやと威されて。日頃さもなき若君の返す詞も涙に暮れ。悄々として出で給ふ。是を館の見納めとはフシ後にぞ思ひ知られたる。地してやつたりと大聲上げ。詞懸繪の鯉の脱け出で行方知れず。下り合へ出會へと呼ばはれば。地上下騒き駈集まる行房御覽じ南無三寶。何者の腕てんがう眼を入れてかくはしつるぞ。天子の逆鱗異國迄の恥辱家の破滅此の時。エ、しなしたり口惜しやと。惱れ果てさせ給ふ所へ。婢の女遽しく。詞疎しや梅若樣の行方なく。お部屋にありし書置と。地いふより母上取手も遲く押開き。奥迄讀みも終らずヤレ梅若を留めてくれ。人に瞞され懸繪の鯉に目を點れしは若が所業。父の叱の恐ろしく館を出づると書いたるぞや。何地へ放ち遣るべきと。駈出で給ふを行房引止め。詞眼を開け班女。天下の大事我が家の破滅を知らぬか。此の懸繪元へ戻らねば生中梅若尋ねんより。此の少將ともに生きて益もなし。地エ、何とせんこれまでと御佩刀に手を掛け給へば。軍介透さず飛掛り御手を押へ。詞御生害は詮の詰鯉の行方は此の池〳〵。水かへ淡へ捕ゆればとて何の事。コレ家老殿何をうつかりと。班女樣にも勢付けて此の間に梅若君。尋ねうとは思はずか。エ、なまぬるい權正殿留守なれば一つも埒がないと。地氣をもめば景逸何がな立ち度い折に幸ひ。畏つたと足早にフシ御前を立つて入りにける。地時に池水逆波立ち。現れ鰭振る鯉の形あれ〳〵一摑にして見せ申さん。詞帶解く間もあら面倒やと諸肌脱いで腰刀。背にくるりと廻ればお庭も程遠し。御免と言捨て一文

字に池へざんぶと飛入つたり。地水に炯の矢の如く馳廻れば追廻し近寄る透間の水放はれ。ひらりと組んで フシ乗つたりけり。地組まれて忿の鱗を立て拂ふ尾先に瀑立てられ。コハリ散るは水玉波の花玉藻水草を搔分けて拔手浮足弛みなく。泳ぎ上ればさらさら〳〵流るゝ水の潮に逆ひ。底を潜つてそことなく沈めば沈み浮けば浮き。鯉は尾鰭の力を振り此方は生死の境の水。ナホス地爰を三途の川波と氣力を。竝べて 三重へ挑み合ふ。地龍は一寸にして昇天の氣を含み。鯉魚は尺にして龍に化するの勢あり況や古今一筆の鯉に與へし瀧の水。逆卷き落つるを事ともせず渦卷き昇る有樣は。和國に聳きし瀧津波。八十丈の龍門をフシ昇りし鯉も斯くやらん。地軍介きつと見。詞言はれぬ鯉殿瀧昇り何國までも御供と。地戚々たる巌壁幸ひに踏締むれば取所なく。蔦を攫めば踏辷り。落ちては上り上つては。遁さぬ遣らぬと聲限りフシ蓉うて巌に這上る忠義の手掛り。地足立に何なく巌に這上り。鯉の顎を引攫み一息はつと吐いだるは。フシ前代未聞の働なり。地行房御機嫌斜ならず眼を拔けば繪絹に戻ると口傳せり。軍介眼を潰せ〳〵と宣ふ所へ勘解由兵衛拔刀して逸散に駈來り。少將の胸ぐら取つて刀を胸許につき當て。これうつそり。常陸の大掾百連公に頼まれお身を殺し。吉田の家配分の契約。其の鯉の眼を突くと少將がほてつ腹突拔くぞと。地聲を掛くれば軍介も南無三寶と控へたり。少將聲を上げエ、無念や運盡き果て。蟲のやうなる人畜めが。計略に乗せられたるも天狗の障碍。よし我は死するとも鯉を二度懸繪に戻し帝へ捧げ。吉田の家さへ立てば本望。我には構はず鯉の眼を抉れ〳〵。詞剞つたら剞るぞ。構はず剞れ〳〵。地軍介と惜まぬ命は天下の忠臣。剞らぬも一家の忠臣奴。迷ふ心を一途に極め。睛をぐつと突通せば。鯉は忽ち消え失せて フシ元の繪絹に名筆のフシ妙不思議とも言ひつべし。地エ、死にたうて死ぬるたわけ者と。主人を引伏せ勿體なくも胸許を刺通し〳〵。サア本望は遂げたり懸物は此方の物と。床にかゝつて卷き取らんとする所へ。谷を傳ひ軍介息を切つて駈付け。景逸が髻を攫んでうんと蹴倒し。詞サアしてやつた。主人の手向に胸板を突かうか。鯉の恨み眼を剞らうか。地エ、よい氣味とせちかふ所へ。百連が加勢の雜人一群に成つて フシ馳せ集る。詞ヤア性懲もなきお客達。地今度の馳走の献立見よと景逸を水の深みへ擲り込み。群りかゝるを事ともせず。取つては池へ投込み〳〵人筏。めたたき鮑人の鮨。身體は水に冷し物。手際は古今の功の物敵は糠味噌おつ立て汁。吉田の家をあへ物には入らざる世話の燒物口。平皿御無用〳〵と睨む眼の壺皿より。無念の涙はら〳〵〳〵。 はらからの子は生別れ。歸らぬも水行くも水。同じ涙を二筋に暇申して若君の行方を。尋ね蓉ひ行く。

地獄別を天外に求むれば蜀山の雲遂に隔たり。魂を地下に尋ぬれば巴陵の水轉流れて止らぬ。世を其の昔に返さんと行房の執權。縣權正武國。一通の訴狀を懷中し。班女御前を乘物に忍ばせ。大理の廳の御門の邊に立休らひ。訴訟の便を伺ひし。フシ忠義の程こそ淺からね。地權中納言大江の匡房憐非運使の別當にて。衣冠繕ひ參内の前驅の前に跪き。詞我等は故吉田の少將行房が陪臣。權正武國と申す者。王人卒去に就き家斷絶に及ぶ歎き恐れ入つたる御訴訟ながら。二人の男子在所知れ難しとは申せども。勅勘の罪にもあらず父母の勘當にも候はねば。地雲水を分けても尋ね出し申すべし。詞梅若か松若か連歸る迄。主人の媚に家督の繼がせ申し度き願の趣。訴狀宜しく御沙汰あつて。上廣大の御憐愍幾重にも仰ぎ奉る。地則ち主人の媚女をもあれに相具し候と。沓の鼻に額をつけ　スエテ合掌。なさぬばかりなり。詞匡房卿打頷き。さもあるべき願何とて延引しつるぞ。常陸の大掾百連。行房の家督を頻に望み。毎日々々の訴訟。幸ひ今日は評定日。百連は早參内を聞く。汝等も記錄所に召出し。對決の議もあるべし。地慈悲を表の御仁政とはいひながら。理を非に掠むる依怙贔屓は更になし。詞御前にてお尋ねの事申し上ぐるとも。少しも偽なく正直を元とする事。利運の種ともなるべしと。詞ゆゝしき大理の官。兼備へたる文武の兩輪　フシ御車寄にぞ入り給ふ。地あれ聞き給へ油斷のならぬ伯父大掾の不道者。遮つてお家の名跡望む由。今日の對決浮くか沈むか一生一度の阿波の鳴戸。只お氣强うと乘物より。助け下せば班女の前。詞いや終に見ねども。御前と聞けば懍然して恐ろしい。眼の前で叩かれつ縛らるゝ者もありけなり。地それを見たらば眼が暈はう。怖や厭や身が顫ふと聲も戰く折節に。決斷所の小門より召使の下番。詞提げて罷出た。吉田の少將後家班女。同じく武國お召し。出ませいくと地呼ばはる聲の調子迄。耳にこたへてハアゝとばかりスエテ消入る樣に見えければ。エゝ詞何とてお心後れし。假令相手が富樓那の生れ替りでも。歪んだ物は歪んで映る。地上は鏡正直の道理を以て。伯父大掾を牢へ入れうと思召せと。詞に勢をつくる中少將後家何故遲なはる。早う出ませいくと。お召し重なる白洲の上。素足は未だ踏みも見ぬ。中門に刀拔き置き御前へ。こそは三重へ出でにけり。地實に芳なる甘棠覽る事勿れと暮ひし聖代の政事を移され。記錄所の簾中に出御あれば。玉座に續いて大理卿大江の匡房三公九卿八座七辨席を連ね。庭上には刑部省の官人等。鐵鞭提げ縛繩手繰つて控へしは。閻魔の前の獄卒に　フシ魚の生えざるばかりなり。地未明より詰掛けし常陸の大掾伸上り。詞ヤイ横道者。何走り出で。詞吉田の少將後家班女。同じく武國お召し。出ませいくと地呼ばはる聲の調子迄。耳にこたへてハアゝとばかりスエテ消入る樣に見えければ。エゝ詞何とてお心後れし。假令相手が富樓那の生れ替りでも。歪んだ物は歪んで映る。地上は鏡正直の道理を以て。伯父大掾を牢へ入れうと思召せと。詞に勢をつくる中少將後家何故遲なはる。早う出ませいくと。お召し重なる白洲の上。素足は未だ踏みも見ぬ。中門に刀拔き置き御前へ。こそは三重へ出でにけり。地實に芳なる甘棠覽る事勿れと暮ひし聖代の政事を移され。記錄所の簾中に出御あれば。玉座に續いて大理卿大江の匡房三公九卿八座七辨席を連ね。庭上には刑部省の官人等。鐵鞭提げ縛繩手繰つて控へしは。閻魔の前の獄卒に　フシ魚の生えざるばかりなり。地未明より詰掛けし常陸の大掾伸上り。詞ヤイ横道者。何

一家もなく。親類とては我一人。殊に先年少將陸奥の國國司の折節。奥州金山貢納金一萬兩引負ひ。大藏省の算用今に立たず。其の身の驅死際の不行跡隱れなく。名跡召上げられ家絶えん事歎かしく。此の百連が後見して。我が二歳の悴に家督を願ひ。今日仰せ付けらるゝに極る所。何者の腰押で無理訴訟を申し妨げ。主の後家と仕組んで。吉田の家を丸呑に仕度いとて爲せうか。根心穢き女め。それ後の繩見たか。引括られ獄屋の新客にならんより。申し下して罷立て地〳〵と詞の權に威され。班女は魂身に付かず。詞武國嘲笑ひ。これ大掾殿。理非は上の御裁き。御邊が立てといへばとて御前を立つべきいはれなし。下々の跡式爭論の樣に見苦しき。惡口雜言の相手にはなり申さず。但し彼の一萬兩の引負は譜代の郎等淡路の七郎俊象といふ者に。奉行申付けし所。若氣の誤。遊女に溺れ。遣ひ失ひ逐電せし故。主人存生にも此の金子を辨へんとの念願。家督請けつぎ一萬兩を償ひ納め。家を立つべき爲の御訴訟。地梅若松若といふ男子二人あるからは。親類衆の肝煎御無用。訴訟の趣天聽に及び子供の在所尋ぬる間。後家の家督相續乞ひ願ひ奉ると。頭を下ぐれば天掾聲を荒らけ。ヤヤ詞男子の嬶子のと上を掠むる曲者。松若は天狗に攫まれ。首は首胴は胴と引裂かれて死んだも知れず。梅若も首縊つたやら。身を投げたやら。影も形もない子供を尋ぬる間とは。エゝまが〳〵しき面付。主人の供して奥州の金山實つたる山賣の山こかしとは汝が事と。地いふより武國ぐつと急き居丈高になり。詞山か谷かは知らず。蟲同然の二歳の餓鬼を家督に備へ後見せんとは。吉田の家を騙取る大騙。ヤ騙とは誰が事。ヲ、誰ならん和主々々。騙といふ證據は。證據が見たくば直に和主が心を見よと。詞を押へひつし〳〵と生木に釘打つ鐵槌論。相手も負けじと燒石に水掛論。雙方理詰の高聲雜色恪勤鐵棒鳴らし。鎖まれ〳〵フン無禮至極と制すれば。詞エゝ大掾め。主人の大事を思はずば。飛掛つて鰓骨蹴つて〳〵蹴裂いてくれん物と。地白洲を掴み涙を浮めスエテ齒切をしてぞ控へける。地御簾半ば捲かせ大納言能信を近く召され。詞大掾百連は少將が先妻の兄弟なれば。緣のみにて血筋にあらず。後家は正しく少將が實子梅若松若が母なれば。家について親み深しさり乍ら。女の身にて夫の家督相續の先例あらば。後家に家を繼すべし。地古例無きに於ては百連が子を家督に立てよ。諸卿各記錄を以て考ふべしとの勅諚。關白頼通を始め教通師實三公以下の上達部。我も〳〵と數多の書を繰披げ。繰返し考へ給へば。白洲には兩相手先例あれかし〳〵。イヤなかれかしあれかしと心の祈り。班女は持病の血の道に氣も上り宙を飛ぶ如く。心の頼みは記錄の面。善か惡かと氣を碎き脈見る醫者の口を待つ。心のフ

ン内こそ危けれ。地有職の公卿殿上人中原清原の學者。家々の名記古記を尊ねてもこれぞといふべき例もなく。大揉生き〳〵いきり出し武國主從氣を落し。人心地もなき所に。調大理卿大江の匡房勿取直し。遠く書を尋ねる迄もなく目前日本紀に出て誰も存じの先例數多あり。地先づ十五代の帝神功皇后仲哀天皇の御后。調仲哀天皇崩御の後大日本の家督を繼ぎ。異國まで從へ給ふこれ一つ。三十六代皇極天皇これ二つ。四十一代持統天皇は天武天皇の御后。十善の御家督を繼ぎ給ふ。君は一天四海の水臣下は潦の溜水。地四海を治め給ふからは溜水は其の身相應の家督。君を以て臣下の先例とするに何の難かあるべき。吉田の少將が家督後家に仰付けらるゝ。相續致せと仰せも果てぬ詞の中ハア。ハア有難しと平伏し三拜手の舞ひ足の踏みども知らず。大揉憚らず。調アヽ御詔議が足らぬ〳〵。彼の女はもと美濃の國野上の宿の傾城。乞食非人の娘も知れず。萬人に枕を並べ身の穢れたる女。勿體なくも神功皇后持統天皇の例を引き。公家の家督とは黜算に釣鐘。かけ組まぬ御評定と。地言へども諸卿聞かぬ顔是々武國。勅諚忝しと存じ早々連れて立ちませい。あつと悅びいざお立ち。サアお立ちと引つつても南無三寶。婦人の性の纖弱きに。今朝より樣々心を揉み。結ほれ解けぬ胸の中。はつと悅びはつと驚き氣は逆上り血も狂ひ。寢覺の如く恍惚と。きよろ〳〵眼なる顔打上げ。調ワハヽハヽ。〳〵。何が可笑しい〳〵。ホヽホヽ。〳〵あれ〳〵〳〵。それ〳〵〳〵。最愛やの。何時の間に誰がしたぞ。其の形見や。手に百八の數珠持つて。雪踏片足下駄片足。鬼柏木の衛門は。都の内にて鞠を蹴るアリイ〳〵。源氏は明石の鯛を釣る。山姥は山路にて。スエテ薪を樵らせ給ひけるゝ。歌知れぬは浮世ぢやナァ。調面白いぞ。地武國も惘れ果て。あさましや狂氣なされしな。せめて内裏の御門を出て道にてもある事か。一大事の所を此の體は何事ぞ。よつくお家の御運の盡。エヽ口惜しし是非もなし。これ正體ない氣を取直し。爰立ち給へと引立つれば。調何ちや爰を立て。エイ推參な。太夫を知らぬか。野上の宿で全盛の太夫。海道一の振手。新造など廻したとは。ちつと違はう。彼の籠の内なは誰樣ぢやえ。知つて居る〳〵。先刻に聞いた王樣ぢやげな。エヽ憎う。何故隱れさんす。其處な禰宜衆頼む。首尾して連れまして來て下んせ。いざ往こう。さあ往こう。明月は廓の祭ぢや。祭は紋日。歌紋日々々を算へ〳〵て野上通を惜氣せまいと其所で鉦打て。鉦を打たいの。くわし〳〵と打たいの。鐘は曉。七つ起して別を送る。禿が振袖惜しや記念の袱紗落せし。あたら物を。中ちつくり茶巾程。紅染に括して。端に唐梅唐松唐花唐草。唐獅子を縫はせた。忘形見の我が子落した。花も紅葉も散

らば散れ〳〵。落せし我が子のあるならば。田舍も。ナホス住みよかるらん。詞其方へは行かぬか。其處にはゐぬか。あれあれ〳〵。それ〳〵〳〵地それ其處に。子供返せとかつぱと伏して。泣き狂ふ。地見る目いぶせく御簾颯と下るれば。諸卿もはらりと立ち給ふ大據悅び。大内の汚れそれ打殺せといふ聲にフシ棒よ杖よと犇いたり。地武國共に狂氣の如く取付けば打拂ひ縋付けば逃廻り。詞何狂女を殺せとや。殺してよくばそれも殺さんこれも殺さん。地我が子は何國に隱せしぞ。尋ねて行かん住家は如何に。家もよしなし宿もよしなしハヅミ奥の深山のその奥山の。地虎狼や鬼一口。雲井の餘所にとんどろとゞろとゞろ〳〵と鳴神も。分けて搜ねん天の川の星の數々戀しや子供。花の容顏秋待ち敢へず。ちり。〳〵。ちり〳〵になれば。母は冬野の末枯凄。夫故亂れ子故に狂ふ庭の。荻原野邊の菊。野分に騷ぐ狂咲狂ひ出づる。ぞ三重〳〵外國や、フシ隅田河原の邊に近き埴生住。夫婦も本は都鳥ある、かなきかの迫世帶。妻は手爪の賃仕事。スエテ小櫛取る間もなけれども。浮世の垢の落兼ねて。本フル乘立ちもせぬ世渡の。憂身にとんと筆捨てゝオクリ針手。綴りの色紙短册歌人に似たるフシ蟹草。地夫は詞を巧にしてよき衣着たる商人の。あるが中にも人商人狼島の惣太とて。貧しき家にも建長刀鎌研立て。鐵の棒堅木の棒竹筧割竹。鼻捻じ其の外子供の貴道具ひつしと列べ。手下の者に働かせ其の身は庵にのさばり臥し。奥坂東の元締して。秋田酒田蝦夷八丈迄賣つつ買うつの人商賣。其の昔丹後の國山椒太夫が手植とて。蕃椒の惣太とフシ近鄕異名を付けにけり。地惣太枕を擡げ。詞ナウ女房今日は三月十五日。上總浦の船日なれど。今朝から如何な一人も買ひに來ず。何國の誰が手柄とて鼻垂一疋も連れても來ぬ。今日の樣な商日に帳面が黑まねば。心持が良まぬ。仕事止めて二三里ぶら〳〵廻つて。男の子でも女の子でも勾引して連れて來て。地今日の帳面祝うてたもと。いへどもふいと顏ふつて何の答もせざりしが。詞なう惣太殿人界の果報は品々。畔の落穗を拾うても暮せば暮す世の中。幾人といふ數もない人の子に憂目を見せ。身に應ぜぬ錢金の手に入りは入りながら。其の融もない此の貧苦其の報とは思はずか。地あつたらお身を賜らし。成下るも皆我故といとしほく。錢一つ手に取らず褲放す間もなく。足掻けども未だ此の上の苦は厭はぬ。とても長者にも成るまいならそろ〳〵營業變へる樣に。思案して下されと打萎るれば。アヽ詞知れた事をくど〳〵と誰がこれを好む物ぞ。よい〳〵昨日八丈へ賣つてやつた都者の色白め。彼奴が先に居付けば金十兩取る筈。地かたまつた金取つて殘る奴等は捨賣にしてしまふ覺悟。お内儀苦に持ち給ふなと戲るゝ所に。配頭の左次太夫

七八歳の坊主子に。猿轡嵌せ手を引立て。詞これ〳〵旦那殿。病氣の無ささうな堅い坊主め。伯母の所へ行くといふ。此の子が伯母知つてちやけな。地逢はせてやつて下されといへば惣太合點し。詞坊主よう來たな伯母はあれちや。地あれ伯母々々と指せば女房を見て怪顚顔。頭振つて逃出づる。ませた餓鬼めと拳三つ四つ喰はせ睨み付けたる有樣は。鬼より增しの猿轡 スエテ泣けども聲の出でばこそ涙ぞ。顔を洗ひける。詞さすが配頭よう釣るぞ。此の小坊主五百で置いて往きや。心に合はずと又何ぞで入合せてやらう。サ手を拍たうか。イヤそれならば今日上總船が出るにつき。十ばかり十一二の眉目のよい娘の子。二人がらり一貫づつに相場が極る。それでは我等もちと儲ける。何と遣る子供はござるまいかといひければ。幸々話したいものの。六つよ水瓜よ此處へ出よ。地あいと應へて何國の誰か愛し可愛いと撫子の。花も凋める面寶れ フシ眞面目顔にて立出づる。詞又吠えたな。これ何奴もよい生れつき。此の顔立で大磯か江口神崎へも遣らるれば。百貫道具なれども。色里へ向ぬ大い疵物。臍が出臍大抵の事でなく。腹の上に一番水瓜置いた如く。こちらは左の手が六つ指。其の代に右の手が三本十に足らずの缺皿。どうも客の間に合はぬが合點か。ハテ見付さへよければ三つ足でも德利子でも樽はぬ。地サアさらり〳〵と手を拍つて女郎ども來いと引立てられ。申し御內儀樣さらば忝うござんすゝ。泣いて出づれば女房も見る眼に涙いぢらしく。可愛やこれを何が忝い。坊此方おじやと手を引いてオクリ納戸の中にぞ入りにける。地惣太獨笑して商拍子が直つて來た。此の勢には彼の都の色白童も落付いたは定の物。今に十兩揑つて其の十兩をム、かうと。かうと面白しと胸の算盤高合せて フシ悅ぶ最中。地搬昆の彌藏若君の小腕攝み。家の內に投込み。詞惣太殿此奴を八丈へ遣れば。此方も十兩我とても只は居ず。何も活計と此の頃骨折口叩き。さあといふ段になり腹が痛む背が痛いと意地張り。間がな隙がな逃仕度蓼酢でも行かぬ餓鬼。これ道に返した金渡さいで仕合。地徒骨折らせた悴めと フシ睨み付けてぞ歸りける。地惣太鑠のやうなる眼を剝き乙に入つたる胴聲。詞蟲程な樣で親程な者に。息筋張らせる不敵者。惡う育たぬ奴とは見た。王の子でも神の子でも。百里二百里榮燿に狼狽歩うか。親許が分散か追汝ろくな事で有るまい。頤養ふ有難しと鬼が島でも龍宮でも。遣る所へ何故往せぬ。地返事せい丁稚めと怒る聲は噛付く如く。腹に響きて梅若君多くの人に敬はれ。親にも主にも一生に荒い詞も言はれぬ身の命も縮める心地にて。八丈とやらんは日本の地を離れ。人の通はぬ島と聞く。せめて親達と同じ日本の地の內にと。手を合せ給へば。詞吐すな〳〵然らば

此の頃足利の辻放下が方へ何故往せぬ。足利は日本の地ではないか。地なう足利は是よりもまだ奥と聞く。一里でも半里でも都の方へやつて下され。死ぬるとも親の方へ向うて死に度い旦那樣。御恩は更々忘れまじ御慈悲〳〵と聲を上げ佛を賴むばかりにて。涙を共に フシ手を摩れば珠貫く。數珠の如くなり。詞エ、口で叱つてはいかぬ奴。小刀鉾で養生し。地ど性骨直さんと。九寸五分するりと拔いてずつと突出し。詞太股を突かうかハア、〳〵。尻臀を突かうかハア、〳〵。動くな。アイ。動くな動いたらほてつ腹突くぞ。アイ〳〵〳〵。眼珠を割うか。脇腹を突かうかと地ちりり〳〵と附廻せば。身を冷し身を縮め涙も出ですぼ頓ひ上り〳〵。逃げても逃さん透間も見せず。詞エ、餘り酷い旦那殿殺さばいつそ一思ひ。地詫言して下されなら内儀樣と叫ぶ聲。女房駈出でなう疎しや子供折檻も程がある。疵付いて誰が損と小刀を捻ぢて引つたくれば。掛けたる鼻捻提け肩腰分かず力に任せ。疊掛け〳〵打つや空蟬の羽よりも薄き御肌。骨も折れ筋も切るゝ思にて。身を開けば足を打ち手を揚ぐれば臂を打ち。悲しむ聲も出でざれば女房打つ手に縋りつき。詞夫婦が命繋ぐも子供の蔭。頃はば醫者に醫者も掛くべきに。地殺して報があるまいかと鼻捻挽取り捨てたりけり。エ、詞愚痴な事。こいつが此方の手へ入るも過去の約束。賣つて食ふ我等も過去の約束。八丈が島へ參らうと吐す迄叩くと。地樫木の寄棒押取りのべ棒もしわ〳〵しわるばかり。聲を掛けて續け打ち棒は強く身は弱く。肋の急所にはつたと受け。うんとばかりに手足を縮め フシ色も變つて息絶えたり。地ハア悲しや可愛や死んだと女房。抱起し手足を擦り胸を合せて看病す。惣太もあきれ。フシ棒投げ。捨てて詞なし。やう〳〵口に。氣付を含め水吹入れて。詞これ息がする最愛や痛いか。苦しいか。何處を指して行く人ぞ。地望あらば何なりとも明暮酷い辛い見て。ぶち叩かるゝ人よりも側で見る目は猶辛い。必ず死んでたもるなと スエテ泣き口說き勞れば。地涙を浮め手を合せ。息疾し氣なる聲細く詞我は都北白河數ならぬものゝ子。父の昔の知邊を尋ね。一度奥州へとは思へども。身飾碎け次第々々に胸苦しく。只今死ぬるに何の望み。地肌の守は生れし時六日だれの產髮。胎内よりの產髮は父母の生血にて。此の上の守はなしと。今日まで身を離さずお情慈悲と思召し。守一緒に我が體を土に埋み。標に柳を。フシ植ゑてたべ。身命は朽果つるとも。父母の生血の產髮は生育ち。柳の髮と茂らば親の御恩の片端も。せめては送る一つの孝行。アゝ母上の嘆く。顏ばせを一目見て死に度い。戀しいも母樣最愛しいも母樣都の人の足手惡も。アアゝアゝ懷しや南無阿彌陀と。舌も縺れ目も變り。五體を惱ます打疵の。杖に刃を

誰が付けて十二歳の玉の緒はスエチふつつと切れて。絶えにけり。地夫婦途方に暮れし所門口に案内乞ひ。詞人買の惣太殿とは此の主か。拙者は上方者少御意得たしといふ風體。地供も連れぬ武士の旅人やら心得ず誰にもせよ。見られてはむつかしゝ死骸を隠せ。それ屏風々々それ莊紙よ趣よと。立騒ぐ間に御免あれと笠取つて入るを見れば。古主吉田の家の執權縣の權正武國これは扨。詞何と淡路の七郎。地これは不思議の御光臨。先づ〜これへと請ぜられ邊を見廻し。詞淡路の七郎俊兼と所の者に尋ねても。左樣の人は存ぜずもと侍衆ならば。人買の惣太と尋ねよと敎へられ來りしが。地扨は人商人になられたかと問はれて夫婦敗亡し。いや〜〜〜勿體ない〜。側に勞れ四辻にのめり死ねばとて。人買などは存じも寄らず。ア、さう申す筈。十一年以前女故不忠を盡し。御勘氣受け斯くの體武具は少嗜めども一僕も使はず。もし人の入る時も傭へば賃が出る。懇の方より今日も人を借り明日も人を借り。再々人を借る故人借りの惣太と異名付けしを言誤り。人買にしてのけて迷惑千萬。ナウ〜女房ども。さうでないとかいひければ。地何やら彼やら憂き事聞きつつらき目見るもお主の罰。昔の科を御赦免あり一度歸參あるやうに。お執成願上げますと フシ打涙ぐむばかりなり。詞いや御代が御代ならば譜代相傳の御分。召返さる筈なれども。思ひがけぬ變によつて吉田の御家破滅し。お家に主一人もなきを知らずかと。地聞きも敢へず手を打つて。ハアハツとは如何にとは如何にと フシ仰天。すること道理なれ。詞始めて聞いて驚くは尤。御臺所の兄常陸の大掾。我が相役勘解由兵衛と心を合せ。家を奪ふ計略。主君御夫婦不慮の横死。松若殿は天狗に捕られ梅若殿は行方知れず。歎きの餘り班女御前は狂亂となり。禁中より狂ひ出で給ふ。詞剩へ御邊の親父前司兼成。主君のお命助けんと敵の前にて腹切つて果てらるゝ。思案も談合も我一人。先づ悔若君を尋ねん爲。北國路より奥方へと志す。若し思ひ當りは有るまいか。御事が見しは二歳の御時今年十二歳。旅寢に色黑みても面體禿外れ。地園生に捨てゝも公家大名。衣裳は破れ垢づくとも世の常ならぬ紋柄。肌の守には吉田の家の吉例にて。御誕生の六日だれの產髮を入れられしは。日本國に只一人それかと似たる物語でも聞かせてたべ。第一忠節第二は情。主人の有りたけ矢ひのめ〜と存らふる心底。思ひ遣られよと スエテ涙に咽ぶ物語。聞く程ひつしと思ひ當り。父が最期にはつとする胸に胴突。喉には。大聲石を押込む如く言葉も出でず只うろ〜と。女房を見れば見交す女心。思は膽に燒鐵刺す身も氣もそゞろに落付かず。地保ち兼ねて大聲上げ。大事があらうと案じたは此の事。悲しやなうとばか

りにて　スエテわつと叫び伏しければ。地七郎も氣を定めつつと出でこれ武國。詞以前言ひしは當座の拔句。誠人買の惣太とは此の淡路の七郎俊兼。主君梅若とも知らず。烏目三貫文に買取り。金十兩にて八丈が島へ賣る所。とかくの御嘆き心に叶はぬ腹立ち。折柴打擲打つ杖が急所に當つて。たつた今空しくなり給ふ。地御死骸拜まれよと屏風摑んで投げ退くる。夢とも分かず武國抱上ぐれば御色變り。御身も氷と冷え切つたり。なう若君梅若樣武國が參りしと。魂魄は御存じか主從三世の緣あらば。半時の半時など臨終を待ち給はぬ。佛神三寶もフシ恨めしやと聲も。惜まず歎きしが。地涙を拭ひこれ七郎。詞御邊知らぬ事ながら其の方ならで三界に相手なし。我も主なしよい死時。地主君の敵遁さぬ來いと刀の柄に手を掛くる。些とも動かず七郎手を突いて涙を流し。詞主殺の惡罪人踏付けて繩をかけ。穢村の手に渡し竹鋸逆磔にも掛くべきを。武士の手に掛け討たんとは生々世々の高恩。とてもの事に暫しの暇連添ふ女にも隱し置いたる罪業の。地塊見せんと立上り。大肌脫いで納戸口の疊引揚げ。簀の下に手を入れ金五十兩三十兩。百兩包摑み出し〳〵投出すは數知らず。堆高く積みなし其の前にどつかと坐し。詞水の月取る猿猴は及ばぬ事の譬ながら。それは畜類叶はぬ願ひに身を苦め。人を傷ふ人間は畜類に劣る。地愚痴第一の淡路の七郎我が身ながらあさましや。主君を掠めし一萬兩の金一生に償ひ。御機嫌を取直し若君達の御馬の口。沓草履を摑んでも譜代の御家に宮仕へ。忠孝を盡し親前司にも悅ばせ。孝の道を立てんと魂に思ひ定めても。詞商賈知らず耕作知らず。人商人の證文を賴まれ書初めしを。惡道の師匠とは。地今日の只今思ひ知る。女房にもつゆ知らせず鶉衣を身にかけ。口に龕食を啜つて溜めたるは鶴の粟。蟻の塔を組む如く十年以來の塵積つて。詞此の金九千九百九十兩。今十兩で願成就と思ふ間のとけしなさ。やう〳〵若君買取るより早や十兩に買手は餘る。泣くとも吠えるとも大願遂げずに置かうかと。地威しの爲に打つ杖は我に當る天罰。其の時此の腕が折れも痺れもするならば。今の歎はあるまじもの。此の上に億萬兩。天に屆く金銀にも買はれぬ人の命を。たつた十兩の金に換へ纔の利德に眼眩み。報に報の利に利が喰ひ。親まで殺す大損知らぬ。因果の算盤フシ違ひなり。語るも武士の恥晒し。詞女房免せ一日も樂させず貧苦を凌ぎ。溜める〳〵と思ひしは忠でもなく孝でもなく。地地獄廻りの道中の路錢を溜めたあさましやと。積んだる金を踏み崩しスエテ踏み散らしかつぱと伏して泣きければ。丸女も共に絕入るばかり道理聞いて武國も。恨むに恨むるフシ方もなく唄返る。こそ哀なれ。ヤ詞よしなき後悔。梅若君を知らぬ先は人商人の惣太。

知つての後は淡路の七郎俊兼。此の七郎が手を以つて主の敵惣太を一刀刺さずんば武士道は立つべからずと。詞側の刀を抜くより早く。左の肋を右の脇一文字に掻切つたり。地女房これはと驚けば武國つつ立ち聞えぬ七郎。地初太刀を我に何故打たさぬ。尤々我一つの所存あり。梅若の御事はいうて歸らず。天狗に攝られし松若の行方は天狗ならでは知り難し。今我腸を摑んで天に捧け訴へ。十一年積りし我慢心。魔道に入つて天狗となり。地山々嶽々深山深谷あらゆる天狗の栖家を探し。松若君を尋ね求め吉田の家の二度の桑を見すべきぞや。腸を刳つての後ずた〳〵に切れ武國。詞ヤイ女房。夫の主の敵人買の惣太を一太刀切らねば淡路の七郎が妻でない。此の詞を忘るゝな。跡の死骸を土に埋むな灰にすな。往還に曝し主殺しの罪科人と。屍に恥を見せば梅若殿への志。地サア只今七郎が天狗になるをよく見よと。兩手を疵にぐつと入れ五臓六腑を摑み出し。コハリ天に抛つ朱の腸虚空に揚つて魔縁の猛火。はや三熱の魔道の暾。どつと吹き來る天狗風魔風旋風ナホス梢を鳴らし雲に飜き三度入りければフシはかなく消えし。地淡路が體フシ眠るが如く絶え果てたり。地武國感涙止め兼ね不忠却つて忠となる。武士の手本といひ乍ら弓矢の法は破られず。主君の敵と名乗りかけ。死骸の弓手を抜打にすつぱと切付け。詞サア内儀七郎が遺言何と何とゝ聲かけられ。地遣方泣く〳〵刀抜持ち右手の肩口丁と切れば。ヲ、出來たお主の敵討つたか御内儀。アヽ討ちました悲しや討つて退けましたと。夫の死骸に抱きつき聲を。限りの別れの涙。地共に死なんと取直す刀に縋り武國が。やう〳〵助け宥むるも思は千々の此の黄金。里の長に預け置き松若出世の料とせば。亡魂の本懐童どもは親里を。尋ね返すは放生供養。魂は魔道に沈むとも魄は冥土に梅若君。中有の旅の御供と二つの骸を一つ野に。墓を並べて父母の形見を遺す。產髪は。延びて千筋の柳髪。佛の御手の糸となる是ぞ標の柳の糸。來る人寄る人往來の人手向の。露と茂りける。

第四

詞こりや大名のお通りだ。先退けろ。振込むさ。赤坂奴髭奴。年中振つても振りやまぬ。文福茶釜に毛が生えた。茶筅で剃つても未だ剃れぬ。振り込めさ。火吹く茶呑もに際がない。先退けろ。任かせておけろのよいやさ。フシよいやさ。よいやさ讃岐の。地金毘羅と。志したる一腰の。大脇差の身も錆びて金けも付けぬ軍介が。梅若君の御行方尋ね佗びにし長の旅。昔手馴れし七つ道具の宿入下馬前玄關前。仕方を今の路銀にて一錢二錢の袖奉加。やう〳〵辿り多度の浦身の毛弛せし大鳥毛。世にふるフシ様ぞ無慚なる。地村里の子供友達誘ひ聲々に。詞奴々鑓屋町へ遣つて退きよ。草

履振つたら錢取らしよ。地所望々々と擧り寄る。詞ヲヽよい子供衆。草履見たいかまつかせろ。總じて草履に三箇の大事五箇の祕事。先づ掣入り舅入りには結ぶの草履。年頭八朔眞の草履。地女中のお供は手先やは〳〵品を振る。お若衆方は尻を振り櫻も八重の奈良草履。今日九重の鼻緒には八練粒練ばら緒綯ひまぜ京草履。海山草履皮草履樣々ありと申せども。詞只今振るは下馬前地御馬の足もびん〳〵〳〵。拙者が孺もびん〳〵〳〵。ひんと跳ねたるフシ跳ね草履。はねて直してない〳〵〳〵。詞是より殿のお門出大八文字の大跨ぎ。手先あがりの目八分。すつ〳〵〳〵。又戻り足すつ〳〵〳〵。地子供の顏に目をつけて振つて廻れど我が尋ぬる。梅若君の俤に似たる人さへ荒男。髭に涙の露時雨振る手も弱り力も落ち。土邊にどうとないフシ泣いて。休むぞ哀れなる。地童ども手を叩きあれ〳〵奴が泣くわ泣くわと寄りたかり。せゝりこそぐりま一つ振れ。ヤレ振れ〳〵とせびらかす。詞やかましい錢も出さず無駄骨折らせ。ほたへ過ぎた餓鬼めら。毛鑓の傍杖地喰ふなと振廻せば。わつと逃げ。詞振らぬというてそりや振るわ。嘘つき奴の粕奴。衞の生えた地毛奴と笑うてフシ散りぐ〳〵歸りけり。身に思ひある。長旅は足よりも先づ氣草臥。眠れ〳〵とそよ吹く風目は明いて居て夢を見る。詞ヤこりや眠たうて堪らぬ。行く先に日限はなし錢無し旅は是が德。ころりと一睡見知らせて目の醒め次第まからんと。地一丈餘りの四面の大石根からむ葛の唐錦。郡鄙の枕〳〵と寢るより早く高鼾フシ蟒蛇と聞きや紛ふらん。地是も供なく連なし旅の像懸や。法螺貝持たぬ山伏の獨り嘯き來りしが。詞ヤア扨のふず者。往還の道に横たはり。のさばり臥したは何奴。ムム合點々々。盜人の晝寢何のあて。地此の頃の道づかれ。我等も少相伴と立寄つて。奴が枕の大石を何の苦もなく片手にちよつと引つ掴み。輕々四五間引退けて兩足ぐつと踏ん伸し。寛に寢たる有樣は不敵にも亦フシ恐ろしし。地起すとなしに軍介枕さがりに目を覺し。眼すりすりヤ。野太い山伏。踏んでくれうかいやく〳〵。鼻明かせて慰まんとそろり〳〵と差足し。片手に撮んで引戻す。相も劣らぬ力は互に眞似する如く。木石物は言はねどもフシ鸚鵡返といつつべし。地山伏ひらりと起直り大石むんずと引止め。詞ヤイ。擂木天窓の味噌奴め。身が獨寢の伽枕閨へ踏み込むのさばり者。斷なしに何とする返しをらうとつつ立つたり。ムヽヽ。なら〳〵腹筋千萬。石の主は當山の山の神。我こそ先に假寢の夢汝が物と岩枕。括り留めうが。引留めうが。兜巾頭を土に着け。くれろと言はねばいかなく。我が物顏に返せとは物くさい。シテ取つて何とする。地まつ斯うするといふより早く引つたくり。ぐつと指上げ一二三遍く

る〳〵と振廻し。片手放しに投懸くる。軍介中にてしつかと取り。詞ヲヽ子供よりちつと優し。サア地戻すぞと投返せば。取つては投げかけ投戻し。二三度四五度せり合ひしは。幼遊のぶり〳〵や。毬杖手毬突羽根の。峯に木魂のどう〳〵〳〵。宙に閃く大石は フシ霰の走る如くなり。地軍介ほつと精疲れ彼奴が力量我に抜群。騙しすませて一討にしてくれんと。笑顔作つて空輕薄。ハヽ〳〵ア、なうお客僧。詞恐らく我に續かん者日本にはと思ひしが。存じも寄らずならぬならぬ。閉口致すと近寄れば山伏ふつと失笑し。其の手はたべぬ奴殿。騙し寄せて討たんとな。望みならば切つて見よと。地詞の下より抜打に能い推量と切付けたり。コハリ左手を打てば右手にあり右手を切れば左手に飛び。裾を薙げば躍り越え。横に拂へば ナホスかい潜り切つても。突いても手にたまらず。軍介呆れて汗たら〳〵とフシ大息ついて茫然たり。詞男たる者刀を抜き血を付けずば差されまい。地コレ血を付けぬかと立寄つて。恥しむれば。詞いかないかな及びが無い許せ〳〵。及びないとは卑怯千萬流石高家の地奉公人後れたるか軍介。サア切つて見よ軍介と名指しに喫驚心付き。我が名を知つて軍介とはシヤ聞く迄ない天狗殿。御主人の仇お家の敵。汝何處ぞで〳〵と日頃の念願。諸天善神の引合せ一寸も飛ばせじと。打ちかくる刀の柄手先ぐるめに確と取り。詞よい目利。成る程我は鼻高々。吉田の家に仇をなす比良が嶽の我ならば。今迄汝を攫み裂かいで置くべきか。地我はそれとは事かはり汝主君の行方を尋ね。世上漂泊の不便さに詞を交し見ゆるなり。汝が尋ぬる人々は。南海西海北陸道。四國にもましまさず。早く此の土を立去つて東の方に赴くべし。いさうれ軍介歸れやつと聞きもあへず。詞エ、似つこらしい。鼻の先がひこ〳〵する。未だに仇をしたいで若君西國に在す故。此の軍介を東へやりほつかりすかたんさせんとな。鬼角汝が詞とはもんち〳〵に出る合點。地二人の若君送り返さば時宜により一命は助くべし。返答ぬかせと挑ぎ放す。腕もすくんで働かず。エ、口惜しい。鼻も羽節も切落さんと思ひ設けし此の腕力。汝が通力には敵はぬか。無念々々と齒ぎしみし。すく〳〵立つてぢだんだ踏みフシ聲も。惜まず泣きゐたり。地ヲヽ奇特々々頼もし。我が身の上を語るとも。人界疑ひの念深くよも誠とは聞入れまじ。理を非にまけて東路へ。歸れといふ程我に張者。隙を見て只一討と不敵にかけ合ふ片意地は。天狗の通力自在にも。フシ持餘してぞ見えにける。詞エ、情張者。よい加減で歸らぬかくどい〳〵歸らぬ。目に物見するが歸らぬか。なに物見せうそれ好いた。どれ物見せよと意地張れば。地今は是非なし是迄と。夕立空の雲霞。脇霧間に姿入るよと見えし。

地 俄にどつと遠近の山峯巌も碎くるばかり。一當あてたる天狗風枯木吹折り吹きしわれば。心得たりと軍介は。大地を力にしがみ付き吹立てられじの力草。根からふつつり吹抜いて風に乘じて地を放れ。吹上け吹き卷き吹返し。東の方へ吹送る。世の言草に是や此の。落付知れぬ旅人を風來。者とぞ 三遍

狂女道行

サイモン拂ひ清め奉るの釋迦は。羅睺羅の親仁にて。布袋は唐子のお媚役。閻魔は鬼の旦那なり。扨日の本の我が先祖。役行者と申するは惡鬼惡魔の蟲藥。今に傳へて跡腹を病まぬ山伏の境界は日待。月待。甲子に。福德延命長久の。代曾代待代參り。人の願ひは庚申己の巳は雲水に。在する足の浦山を。ナホス進めて東にフシ下るなり。地又爰に子を失ひ歎きの餘りに心亂れ。問行方を尋ね東路へ下る女性の候。見る目も痛はしく。此の二三日道つれしが。地あれ〳〵あれへ狂うて正體なや。暫く是に待受け。臨問問ひ慰めて參らせんと思ひ候。一聲〳〵春の來る。空も霞か瀧の糸。亂れて名をや。流すらん。問なう道行く人に物問はう。梅若といふ十二三の幼子に。もし逢ひはなされぬか。何逢ひも見もせぬとや。乳のむ燕夏長けて。母戀しとも慕はずか。ふつつと歎かじフシ思はじと。地思ふも弱る玉葛オクリ風に。散り〳〵ヤッ散り〳〵〳〵散つて揉まるゝ笹の葉に。幣切りかけて神よ神。逢はせてたべと願事の。胸に鈴ふる高師山九重霞む故郷を跡に見捨てゝ大井川。フシ子故の波に。浮き沈む。スエテ親の輪廻の足弱車フシ狂ひ。巡りて佇めば。ワキ地法界坊心付き。問此の頃の教訓教化にて少しは心鎖まるべきに。惡鬼入其心と聞く時は野干の魅入りも測りがたし。地いで一祈りと錫杖を。千早振々神おろし。二人赤い天狗に白天狗。友禪染の天狗達をどつと袈めて招いた。臨先づ筑紫には彦の山。深き頼みに四王寺。讃岐には松山フシ除賓む。雪の白峯。扨伯耆には大山猶京近き山々。フシ愛宕の山の太郎坊。比良の峰の次郎坊。名高き比叡の大嶽はオクリ逢ふと。いふ字の耳に立つフシ心横河の。流れなれ。葛城や高間の山。山上大峰フシ釋迦が嶽。ワキ地難行苦行のすた〳〵坊主。フシすた〳〵いうてぞ加持しける。シテいや四方に風なき藤枝の。我から狂ふ。梢とは知らぬ御僧の。フシ愚かさよ。二人フシ馴れにし旅の。友なれば。何に心を岡部の宿にたんだ一夜は轉寢。葛のギン細道。宇津の山邊のフシ夢は一富士。似たかよ葛の山も外にはすつとん〳〵。走付く〳〵〳〵手鞠子に。沖津玉藻の年寄りて磯の白波由井浦原や。田子の入海フシ底となく。箱根の蓋の富士の山。尋ぬる我が子に大磯の。名は偽りの懸子かと天に憧れ地に伏して。歎けば見聞く涙の玉フシ輪袈裟に露や結ぶらん。ハ

ルフシ恥も人目も。身をも人をも思ひ思はず戀し心がきよつ〳〵〳〵。きよつとなつては現なく。シチなう〳〵我が子がそれそこに。揃ひ浴衣に花かいらぎ。踊り振りの優しさ。物に譬へて得申すまいよの。いで自らも一踊りコレ山伏殿音頭々々。始めて三保の松原越えたゑ。二人松原越えたやつさ。クドキ松を木偏に書きそめて何時の月偏日偏よりか。物に狂ひの女偏我が詞偏壺しても。其の馬偏の耳偏に風が吹くとも聞き入れぬ。見る目糸偏山伏もとんと土偏と諸共に。狂ひ喚くぞ。是非もなき。是は昔の物語。されば難波の色里偏に。車偏屋の小里というて人の憎まぬ米偏なるが。其の美しさ天人偏の磨き立てたる玉偏故に。手偏さす人山偏なれどとても金偏なければならぬ。仇な口偏叩。うよりは。爰でしやんこゝとな思ひきれさ。ナホス思ひ切れとは。フシ曲もなや。フシ唐天竺へは。よも行かじ東は津輕蝦夷松前。長地西は九州薩摩潟南は紀の路熊野浦北は秋田路佐渡が島。虎伏す野邊の果迄も。尋ね巡らであられうか。あら戀しの梅若や。よや梅若と呼び焦れ心そゞろにとつかはと。急ぐ程が谷打過ぎて或は。野に臥し山伏も。連れて狂氣に蘇民書札若柴の武藏野や。草の莚にいざ暫し暫し。とてこそ三重へ憩ひぬ

フシ春に先立つ。冬梅は。雪を穿ちて芳しく。妻に後るゝ仇し身は。後家とて立つるフシ家もなし。タヽキ渉り流れの水馴棹。世の憂節を獨りして。筆に書きつゝ隅田川。地離れし夫の彼の岸へ到るは弘誓の渡し船。爰は武藏と下總の中に流るゝ隅田川。婆婆と冥途は變れども。心は同じ渡船。接待の船召されぬか。フシ旅人なうと漕寄する。シチフシ狂ひ巡りて。母御前。こと問ひかはせし山伏も。見捨てゝ何地行方のなく〳〵獨り彷徨ひて。千里を行くも親心子には果しのなかるらん。袖は涙に色變へし。フシ隅田川にぞ着き給ふ。地船長待受け何故女中の亂れ姿。詞思ひあつてか悼はしや。向ふへ渡る人ならば自ら越して參らせん。疾く〳〵船に召さるべし。シチなう同じ世に同じ人ながら。變るは心々ぞや。爰より下の渡し船我をも乘せてと頼みしに。心強き船頭にておことは都詞狂女と見えし。面白う狂うて見せずば船に乘せじとありし故。地うたてやな隅田川の渡守ならば日もはや暮れぬ。船に乘れとはいひもせで船に乘るなと仰せあるは名にも似ず。ヲヽ野暮らしと一本させて參りしぞや。夫には引換へ疾く船に乘れ渡さうとは。しほらしやお嬉しや。亂れ心も思ひ子の生きてありとも。死んだとも行方在所の知れぬゆゑ逢はゞ何しに狂ふべき。詞船。こぞりて狭くとも。乘せさせ給へ渡守お慈悲ぞや乘せ。ナホスフシたび給へ。ツレ地實に業平の中將も。此の渡しにて スエテ名にし負はば。いざ事問はん都鳥。我が愚ふ人

は。ありやなしやと我も昔の所縁をば。いざ事問はん都人折節外に人もなし。怪我なされなと助け乗せ。ギンオクリ押出す。船にさす棹の フシ底より深き。地主従の縁ともいざや白波に フシ跡の岸根は隔たりぬ。シテ調コレ渡守の女性物問はう。向ひに松と柳を植ゑ二つ並びしあの塚は。様ありけなり聞かまほし語り給へとありければ。ツレ船長頻に涙ぐみ。向ふに並ぶ名所々も問ひ給はず。塚に目をとめ問はせ給ふも縁ならめ。地此の船の着く間謂れを語り聞かせ申さん。一つは亡者の罪障消滅。自他平等 スエテ御回向。頼み参らする。調扨も此の下總に住む人あり。元は都の御所侍傾城狂ひの金銀に。主君の目を掠めし科御勘氣を受け追出され。地夫婦東の知邊を頼み住家は妥ぞ本庄に。機織り糸繰り濯ぎ洗濯飯炊く業も知らぬ女。夫は弓馬の道ならで賣買算勘量目も。暗き渡世の糸切れて。命を繋ぐ フシ手術なく。あさましや人賣に成り下り。幾千萬か人の子に辛いめ見せし罪科と。スエテ子を失ひし親々の。歎きが積りに積つて身一つに重き天の譴め。調去年三月十五日。遂に自害し世を去つた。塚は標の松一木。因果の日數巡り來て。しかも今日は一周忌。地命日に當り候ふぞや。又此方に柳を植ゑし御塚の謂れをいも悼はしや。調都育ちの。御稚兒の。十二三になり給ふを人商人の誘拐して。かの人賣に又賣り渡す。旅の勞れの御悩みを無性者よ强情者と。戚しの爲に打つ杖の愈所にや當りけん。又定業にや在しけん既に末期と見えし時。歌苦しげなる聲昔にて。我は都の者なるが。東の果の。土となる。母上かくとは知らずして。待ち侘び給はんナホフシ悼はしや。地都の人の足手影も懐しと。是を最期の記念の詞轉寢の夢と消え給ふ。土中につき込め柳を植ゑしも御遺言。調なう何よりも悲しきは。よく〳〵聞けば殺せしお稚兒は人賣が譜代相傳のお主。それとも知らぬは天命主殺しの十惡人。其の座を去らず自害せし二人の塚はあれぞかし。地今斯く申すも恥かしや。自らは其の人賣の妻となるも。因果と因果惡人の妻よ女房よと。スエテ人にも疎み果てらるる。地生きての苦患に比ぶれば。死ぬれば佛の頼みもあり。生中世に存命へ水一滴花一枝。主君のお爲夫の爲誰か手向の知邊はなし。調心ばかりの接待に旅人渡す法の船。上臈も都人ならば柳の本にて一遍の御回向頼み參らする。ヤ。はかなき因果の長物語お船が着いて候ぞ。地靜かに上らせ給へとスエテいへども船に伏沈み フシ前後も。涙に咽びしが。シテ地なう只今の物語稚兒の名は聞き給はずか。ツレ調稚兒の御名は梅若君。シテさて父の名は。ツレ吉田の中將行房朝臣。シテ地なうそれこそ尊ぬる我が子よ。あの塚の下にとや。いで顔見んと現なく三重船を飛ぶともへ走るとも岸にひらりと駈上り。空しき塚に抱き付きやれ梅若よ母なるわ。

斯程焦れ迷ふもの何の憎みに母一人。跡には殘し捨てたるぞ恨めしや懷しや。あはれ夢にもなれかしと標の柳に身を投げかけ。塚にどうと伏し轉び聲も惜まず泣き給ふ。ツレ地船長駈け寄り扨はお御臺樣かいの。かの人賣とは淡路の七郎。自らは女房唐糸と申す者。夫が科の申譯梅若君の御最期を。語るにつけて先の世の。敵と敵が此の世にて主從となりしかと。シテ地いへども母上は兎角の答へも泣き沈み。涙の雨や隅田川。フシ水の水嵩も增さるべし。ツレ御歎きお道理。フシさりながら。詞親の涙は火炎となり其の子の功德を燒くとかや。幸ひ祥月御命日只若君の御跡を弔ひ給へ。地我も亦罪深き夫の後生の願ひ。光明普く十方の世界を照らし。念佛の衆生を攝取して捨て給はずと聞くなれば。念佛ぞ後生の杖柱と鉦鼓を母に參らすれば。シテ撞木も取らでつく〳〵と標の塚を打ち眺め。なう今迄はさりとも逢はんと思ふを心の力にて。知らぬ東へ下りしに果敢なや此の世になき跡の。スエテ標ばかりを見る事よ。扨も無慚や死の緣とて。生れ所を立ち去つて東の果の。道の邊の土となり。往きかふ人の蹴上げの塵かゝる身となる梅若が。後の世もフシ嘸あらん。あさましの身の果や。無慚の標を見る事よと。大地を叩き聲を上げ悶え焦れて泣き給へば。ツレ地これ皆夫の誤ゆゑ。免し給へと平伏して涙限りの叫び泣き。フシ道理せめて哀れなり。シテ我が子の爲と母上は鉦鼓取りあげ諸共に。南無西方極樂世界三十六萬億。同號同名阿彌陀佛。南無阿彌陀。南無阿彌陀。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛南無阿彌陀。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀。シテ詞これなう唐糸。只今幼き者の聲として幽かに念佛の聞えしは。正しく梅若が聲ござめれ。塚の內とは聞かざるか。ツレ詞仰の通り塚の內所詮自からが念佛を止め母君ばかり申させ給へ。シテ地隅田川原の波風も荒くなよせを南無阿彌陀佛〳〵南無阿彌陀。南無阿彌陀佛南無阿彌陀。地猶懷しき都鳥。今一聲の聞かまほしけれ南無阿彌陀。南無阿彌陀〳〵。南無阿彌陀佛南無阿彌陀。二人地稱ふる聲と諸共に標の柳の蔭よりも。ツレ現れ出づる稚兒の影。シテヤレ梅若よ我が子かと。抱き付けば跡もなく消えみ消えずみ。シテ見えみ。見えずみ 二人隅田川。水の哀れや靑柳の。枝に殘るは春風のフシ音しん。〳〵たるばかりなり。シテ地悼はしや母上は生れ出でつつ死に入りつ。生中見えずば見えぬ迄重ねて歎きを見るよな。ふつつと歎かじ是迄と。川岸に立上り既に御身を投げんとす。ツレ地一村蕭蕭雲中に。暫し〳〵と止むる聲も矢を射る三聲如く。音に聞きたる天狗の姿。右手の腕に松若を助け乘せ。雲間を押分け踏分け忽然と顯れ出で。地知らじ我こそ淡路の七郎。最期の一念によつて魔道に入り。主君の恩を報ぜんと爲。假に山伏と變じ母君の旅路を慰め。

詞御歎きをとゞめ哀愁の念を拂はん爲。地梅若君の幽靈と見せたるも誠は御弟松若君。雙兒の同じ佛は御眼にも違はねば。梅松若の二君とも此の君一人に慰み給へ。是こそ比良が嶽の大天狗の連れ行きし松若君。只今返し奉ると。シテ聞くも夢かと走り寄り抱き付けば。ツレ抱き付き。シテヤレ松若か。ツレ母上かと。二人死したる人の蘇生り。浮木の龜や優曇華のフシ稀の逢瀬ぞ緣深き。ツレ時にありつる天狗の姿一團の野火と燃え上り。我が行く方を知るべにせよ若君出世の導きと。空に聲あり賴みある跡を蕪ひて人々は。二人フシ又都路に。立ち歸る元より魔佛一如にて。死生淨淨天然と心動かぬ武士は。忠に止まり義に止まる親に先立つ葉末の露。夫に離れし床の海。思ひは千々に變れども止まる。所南無阿彌陀。南無阿彌陀佛の聲ばかり。跡に殘して今迄も硯の水の隅田川淚に。染めぬ袖ぞなき。

第五

地驕は愚人の病にして禍其の身に及ぶといへり。されば常陸の大掾百連邪の理を以て。吉田の家を掠め取る暴惡憚る所なく。地驕る心は上見ぬ鷲秋まだ淺き北白河。流す花火の唐錦是ぞ酒宴の一興と。堤に大幕打廻かせ館中玉の酒肴。山も川も我が物顏。フシ横柄らしく坐しければ。地執横伴の藤内を始め近習外樣隔てなく。皆川岸に居流れて オクリ暮るゝを。遲しと待ちゐたる。地少將一家の人々は七郎天狗が通力にて。程なく都に立ち歸り。敵大掾を圖らん爲。長地班女御前と唐絲が目馴れ覺えて下總の。花火を移す形容も。東女に似せ紫の。フシ頰被り。花火召しませ。地召さぬかと松振り立てゝ忍び寄り。詞此の筒は龍星と申す花火。水に入り雲に入り樣樣の仕掛あり。地御目に掛けんと班女の前。火繩を筒にかひ〴〵しく切つて放す玉藥。目的違うて藤内が肋骨。とうと打拔く鐵砲に フシ血煙立てて息絕えたり。地百連驚きそれ狼藉者討ちとれと。拔きつれ〳〵討つてかゝる。群集の中より權正武國奴軍介踊り出で。詞故吉田の少將行房の妻子家來ども。百連誅伐の宣旨を受けて斯くの通り。地一人も餘さじと弓手に現れ右手に開き手を盡してぞ 三重〳〵切り盡す。地御敵亡び失せたりとにつこと笑うて立つたる所へ。中納言匡房卿松若を誘引あり。吉田の家皆松若に勅許なると安堵の綸旨渡さるれば。各はつと頭を下げ勇み悅ぶばかりなり。地かゝる時節に逢ふ事も匡房卿の御執成し。詞御禮申さん詞もなし。幸ひ仕掛けし此の花火。詞御饗應にと班女の前 オクリ心を。盡し焚く花火。地先づ始の一曲は五穀豐儁の此の時に。廻り車の珠簾小町が歌の。花車百夜車の仇車。浮名かき消せ淀川に。歌淀の川瀨の水車。誰を待つやらくるくると。ゐいと。〳〵〳〵ソレハゐいゐいとんな。ソレハゐ

いとんなナオスサア。 フシ浮世は戀の口車。次の花火は。朝顔の朝な〳〵に。咲きかへて フシ盛り千歳の。 竹垣に露を含める如くにて ハヅミ眺め。 優しき風情なり。 地花火の花の上漕ぐ船と詠み置きし其の歌枕。 背枕に紫匂ふ檜幕錦の纜 フシ蘭の楫。 フシ照す火影の。 朱のそほ船船子とも 舟歌やらん〳〵。 目出たいは神の。フシ氏子の夏神樂。 地波も色なる迎ひ提灯ちやうさやようさ渡り拍子の。 鉦太鼓。天滿宮の神事迄。 火を以て作る水の面。手を盡したる舞扇。 開く白地や白川の。家の要の松若君千代萬歳の若緑。 枝葉榮ゆる常盤木の幾春秋をとこしへに治まる。國こそめでたけれ。

七行大字直之正本とあざむく類板世にありといへども又うつしなる故節章の長短墨譜の甲乙上下あやまり甚だすくなからず三寫烏焉馬なれば文字にも又違失多かるべし全く予が直之正本にあらず故に今此の本は山本九右衛門治重新に七行大字の板を彫りて直の正本のしるしを糺せよとの求めにしたがひ予が印判を加ふる所左のごとし

竹本筑後掾

正本屋　山本九兵衛版

（墨印）

竹本
博教

大阪高麗橋壹丁目　山本九右衛門版

印